

# Announcement

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: The Society for the Study of Phytogeography and Taxonomy, メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/00055716">http://hdl.handle.net/2297/00055716</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 会 記

## 新入会員 (1992年5月～1992年10月)

- 5月20日 畑中 康郎 〒921 金沢市弥生1-26-5 北溟寮  
5月27日 奥村 直明 〒486 春日井市鳥居松町1-24-4  
6月9日 白井 伸和 〒060 札幌市北区北20条西7丁目20番地 登別荘  
6月9日 中垣 明子 〒399-45 長野県上伊那郡南箕輪村8304 信州大農学部農場研  
6月24日 中新田育子 〒206 東京都稲城市向陽台4-4-1 ビュータワーズ3-801 小林方  
7月2日 杉村 康司 〒270-01 千葉県流山市若葉台58-316  
7月6日 石須 秀知 〒930 富山市奥田新町13-11  
8月3日 下山田 隆 〒840 佐賀市北川副町新郷298  
9月8日 沢崎 孝也 〒919-01 福井県今庄町八飯30-22

---

## 退会会員 (1992年5月～1992年10月)

- 福田 節子 〒641 和歌山市松が丘1-7-14  
峰村 まさ 〒388 長野市篠井布施高田534  
諏訪 哲夫 〒243-02 厚木市下荻野580  
豊国 秀夫 〒390 松本市旭3-1-1 信州大学教養部生物 (死去)

---

## 住所・氏名変更及び訂正 (1992年5月～1992年10月)

- 本淨 高治 〒920 金沢市丸の内1-1 金沢大学理学部化学 → 〒920-11 金沢市角間町 金沢大学理学部化学  
木村 久吉 〒920 金沢市小立野5-9-2 経王寺 → 〒920 金沢市天神町2-15-10-202  
鯨 幸夫 〒920 金沢市丸の内1-1 金沢大学教育学部 → 〒920-11 金沢市角間町 金沢大学教育学部  
中越 信和 〒734 広島市南区翠4-16-24 ヴィラ翠町204 → 〒731-42 安芸郡熊野町3375-13  
西田 治文 〒281 千葉市朝日ヶ丘町2690-1-205 → 〒262 千葉市花見川区朝日ヶ丘町2690-1-205  
西本 孝 〒662 西宮市大社町1-41-105 → 〒709-05 岡山県和気郡佐伯町田賀730 岡山県自然保護セン  
ター  
野呂 征男 〒468 名古屋市天白区天白町八事裏山15 名城大学薬学部 → 〒468 名古屋市天白区八事山150  
名城大学薬学部  
沖田 貞敏 〒019-03 秋田県雄勝郡雄勝町秋ノ宮中島66-1 → 〒014 秋田県大曲市須和町2-1-19  
斎藤 信夫 〒030-13 青森県東津軽郡蟹田君上蟹田62-2 → 〒030 青森県大野岩宮100-18  
佐藤 隆雄 〒959-04 新潟県西蒲原郡西川町大字すずき2-1 新潟県立西川竹園高等学校 → 〒956 新潟市秋  
葉1-19-1 新潟県新津高等学校  
清水 建美 〒920 金沢市丸の内1-1 金沢大学理学部生物 → 〒920-11 金沢市角間町 金沢大学理学部生物  
田中 徳久 〒245 横浜市泉区岡津町1500-2 ルネ戸塚弥生台401 → 〒245 横浜市泉区和泉町4228-3 サ  
ンメゾン201  
田中みち代 〒649-71 和歌山県伊都郡かつらぎ町背の山493 → 的場みち代 〒643 和歌山県有田郡湯浅町湯  
浅1410  
綿野 泰行 〒920 金沢市丸の内1-1 金沢大学理学部生物 → 〒920-11 金沢市角間町 金沢大学理学部生物  
横溝 康志 〒321 宇都宮市宿郷町739-1 → 〒321 宇都宮市峰1-3-27

## 1992 年度大会の報告

さる 6 月 6 日 (土), 7 日 (日) に金沢において 1992 年度の大会が行なわれた。6 日 (土) の午前中には評議委員会, 午後には総会と講演会が金沢大学で, そして会場を兼六荘に移して懇親会が行われた。翌 7 日 (日) には犀川ダム周辺にてエクスカージョンが行われた。

総会では, 前年度の活動報告および決算, 1992 年度の活動予定と予算案が示された。また会員数の年間動態の資料が配布され, 会員数は最近の 4 年間に若干の減少傾向があることが示された。その他, 総会で報告あるいは決定された主な点は以下の通りである。

1. 昨年度の総会で提案・確認された特例措置「1991 年の総会において選出された役員の任期は 1990 年総会で選出された役員の任期との同調を計るために特に 1 年とする」は不要になったことが報告された。
2. 役員の任期切れにつき, 役員の選出を行った。本会は学会組織となってからまだ 2 年しか経っておらず体制としてまだ整っていないことから, 役員の再任が提案され承認された。選出された役員は別項に示した。
3. 次年度の大会は新潟で日本植物学会北陸支部会と合同で行うという提案が承認された。この案は北陸支部会側に現在打診中であり後日同会の総会に計られる予定であることが会長から報告された (その後北陸支部会でもこの案は承認され, 次回大会は 1993 年 6 月 5 日, 6 日に新潟市で合同で行われることとなった)。

講演会是一般講演 6 題, 特別講演 2 題が行われ, 予想を上回る 90 名近くの多数の参加者が集まった。地球環境保護への関心が世界的に高まる中で, 特別講演のテーマである熱帯雨林的動態や保護について, 興味を持つ人々が会員内外を問わず多かったことを反映しているのであろう。特別講演は, 甲山隆司氏 (京都大学生態学研究センター) による「多雨林的林木サイズの分布動態」と山田勇氏 (京都大学東南アジア研究センター) による「熱帯林における種の保全」であった。今後もこのような盛会になるよう期待したい。

懇親会は大学近くの兼六荘にて, 鳴橋直弘氏の司会のもとで賑やかに行われた。講演内容や学会の今後についての意見などがかわされ, また会場の準備に当たった学生達の労がねぎらわれた。 (原 信彦)

### 1992—1993 年度植物地理・分類学会役員

会長	清水建美				
評議員	河野昭一	里見信生	鳴橋直弘		
編集委員長	清水建美				
編集委員	古池 博	福嶋 司	河野昭一	北川尚史	木下栄一郎
	鳴橋直弘	里見信生	鈴木三男	F.H. Utech	綿野泰行
庶務幹事	鈴木三男				
会計幹事	綿野泰行				
幹事	古池 博	御影雅幸	依田清胤	原 信彦	
会計監査	鳴橋直弘	鯨 幸夫			

### エクスカージョンの記録

今回で第 3 回目を迎える植物地理・分類学会 1992 年度大会のエクスカージョンは, 1992 年 6 月 7 日 (日曜日), 金沢市南東部に位置する, 犀川上流域の上辰巳町 (標高 100 m) から犀川ダム (標高 300 m) までの, 片道約 10 km のコースで行われた。

エクスカージョン当日は, 朝 8:30 に金沢大学理学部玄関前に集合した。参加者は総勢 37 名となった。また, 折しも来日中の, 中国科学院昆明植物研究所の徐延志 (XU Tingzhi) 博士にも, ゲストとして参加していただいた。今回は犀川の峡谷部に沿ったコースとなるため, 上辰巳町, 駒埴町, 寺津発電所付近, 旧見定付近, 犀川ダムの五ヶ所を主な観察候補地と定め, その間を自動車で移動する段取りとなった。会長挨拶, コースの概要説明などの打ち合わせの後, 前回同様に参加者を 3 班に分け, 自動車に分乗して出発した。

犀川に沿って上流部へと向かう車道は, 峡谷が深まるに従って, 谷斜面の中腹を走るることとなる。第一の観察地点である上辰巳町付近では, 谷底に至るためには, 犀川ダムへと通ずるコースをはずれ右側へ 50 m ほど下ることとなる。また, この先の車道の幅は狭く十分な駐車場所を確保できないため, この時点で参加者は二手に分かれることとなった。上辰巳町付近の犀川の両岸は, 50 m ほどの急斜面となる深い谷を形成している。谷底では, ミゾホオズキ, タツナミソウ, シライトソウなどが観察された。赤く色づくヤマグワの果実をたべてみたが, まだ酸味が強く, 完熟するまではもう少ししばらく待たねばならなかった。

駒形町付近では、峡谷はその深さをいっそう増しており、壮観であった。紅葉の時期に改めて訪れてみたいものである。谷底まで降りる時間のなかったことが心残りであった。

寺津付近は、チドリノキをはじめとするカエデ類の豊富な場所、とのことであったが、当班は予定より遅れ気味だったので、この観察地点は横目でみながら素通りした。

旧見定付近で、先発した2班のうちの1班と合流した。30年ほど前までは、車道から犀川をはさんで対岸に見える、谷急斜面の中腹に集落があった、とのこと。この付近では春先に山菜取りの老婆をよく見かけるが、以前この集落で生活していた人たちなのであろうか。当時の人々のたくましさに驚きを禁じ得ない。

犀川ダムにて3班すべて集合し、昼食となった。食事のあとに自己紹介を行い、清水建美先生、里見信生先生から、この地域の植生などについての解説をいただいた。また、徐博士から英語によるスピーチをいただいた。その後、周囲の山腹で目を引くニセアカシアの花が話題に上がった。植栽されたものと考えては間違いのないだろう、ということで話は落ちついたが、通いなれたはずの場所であるにも関わらず、恥ずかしながらこの時まで、筆者はニセアカシアがこれほど多くあることに気付かなかった。たとえ既知の場所であったとしても、季節を違えて訪れることの大切さを改めて知らされた思いであった。

昼食の済んだ時点で一応解散となり、午後は、さらに奥まで足を延ばす班と、金沢市街に戻る班とに分かれた。ここから先は自動車は入れず、徒歩での観察行となる。ダム湖岸に隣接するブナ林まで、片道約30分の行程である。途中のカン谷周辺では、ミヤマカワラハンノキの群生やクロバナヒキオコシ、ツリフネソウ、ミヤマライクサなどが観察された。各自、思い思いに観察・採集を行いながら往復した。

最後に、有志により犀鶴林道に足を延ばした。この林道は、駒形町から熊走・国見山南稜線を経て鶴来町まで続く予定のもので、現在整備中である。自動車で10分ほど走ったところで観察を行い、その後、各自帰路へとついた。

今回のコースは、犀川の中流域から上流域の溪谷林、犀川ダム周辺のブナ林と変化に富んだものであった。また事故もなく、天候も予想以上に崩れることなく、充実した一日となった。(依田清胤)

---

#### ○ Plant Molecular Evolution Newsletters—an informal forum for the exchange of idea and data について

ここ10年ぐらいの間に、生物の類縁をDNAのデータに基いて解析しようとするいわゆる分子分類学・分子系統学・分子進化学の諸分野がいちぢるしく発展して来た。中でも、植物学の分野では、葉緑体DNAが比較的とり扱い易く、構造も保守的であるとの理由からどんどん使われることになった。本誌でも、私が39巻1号に植物分子分類学の状況をレビューした。そのうち本誌にも本格的な分子分類学の論文が登場することになるだろう。

ところで、私は1990年秋に日本におけるこの分野の発展を願ひ、植物分類・地理学・分子遺伝学・分子生物学・生物統計学など関連する諸分野を糾合し、「植物分類・分子系統研究グループ」を発足させ、その年の10月から季刊のNewsletter for Plant Molecular Systematicsの発行を始めた。この研究グループは現在85名のメンバーの規模となり、ニュースレターは、本年10月で第9号となった。

面白いことに、このような考えは誰でももつものとみえ、実は国際的な植物分子系統・分子進化学の情報交換の場を作るといふ動きが出てきた。つまり、今年1月ドイツのケルンで開かれたUNESCO Conference on Plant Molecular Phylogeneticsの席上、表記のNewsletterを季刊として発行することが決められた。そして、今年7月、私達のNewsletterにおくれること1年9ヶ月にして創刊号が出版された。

このNewsletterは、世界中の研究者が効率よく研究を進めることをねらい、論文にもものらずデータベースにも入っていない生々しいデータや研究状況を、筆者の原稿のスタイルそのままに印刷・製本して、迅速に配布することを目標につくられている。たとえば、創刊号では世話役のP. G. Martinさんは、現在サトイモ科・イディオスペルマ科・ヤマモガシ科ほかの18sおよび26srRNAの塩基配列のデータが印刷中、ヤマモガシ科・シキミモドキ科などのrbcLの塩基配列を決定中、1993年にはマキ科のrbcLの塩基配列決定を計画中であることを報告しているし、第2号ではBremerがリンドウ目全体の系統関係を葉緑体DNAのRFLPやrbcLの塩基配列決定を通して研究中であることを述べ、JansenやPalmerもそれぞれ現在の研究状況を紹介している。このNewsletterに関心をお持ちの方は、W. Martin, Technische Universität Braunschweig, D 3300 Braunschweig, Germanyに照会されたい。(清水建美)

## 一 共同主催国際会議閣議了解得る 一

平成4年9月 日本学術会議広報委員会

平成5年度の日本学術会議の共同主催国際会議6件については、平成3年5月の第111回総会において決定されましたが、政府としても、本年6月30日の閣議において、これらの会議を日本で開催すること及び所要の措置を講ずることを了解しましたので、お知らせします。

### 平成5年度の共同主催国際会議の閣議了解

1. 日本学術会議では、昭和28年9月の国際理論物理学会議、昭和30年の国際数学会議の開催以来、平成3年度までに123件、本年度も6件の国際会議を関係の学会と共同して開催し、我が国のみならず世界の学術水準の向上に努めてきたところである。平成5年度にも、下記の6会議の共同開催を既に平成3年5月に決めているが、本年6月30日、政府全体としても、これらの会議の開催とこれについての所要の措置（会場・警備・入国手続き上の配慮・予算措置等）を講ずる旨の閣議了解を行った。  
（平成5年度開催会議）

- ・アジア社会科学協議会連盟第10回総会  
平成5年9月5日から11日（川崎市・かながわサイエンスパーク）
- ・第15回国際植物科学会議  
平成5年8月23日から9月3日（横浜市・横浜国際平和会議場）
- ・第7回太平洋学術中間会議  
平成5年6月27日から7月3日（沖縄県宜野湾市・沖縄コンベンションセンター）
- ・第24回国際電波科学連合総会  
平成5年8月23日から9月3日（京都市・国立京都国際会館）
- ・第21回国際純粋・応用物理学連合総会  
平成5年9月20日から25日（奈良県奈良市・奈良県新公会堂）
- ・第6回国際気象学大気物理学協会科学会議及び第4回国際水文科学協会科学会議合同国際会議  
平成5年7月11日から23日（横浜市・横浜国際平和会議場）

（閣議了解の内容）

〔各国際会議ごとに了解〕

- 1 〔各会議名〕を（共同主催学会名）と共同して平成5年度に我が国において開催すること。
- 2 関係行政機関は、上記会議の開催について所要の措置を講ずること。

2. なお、国際会議共同主催の申請から決定までのスケジュールはおおむね次のようになっている。

- ・会議開催3年前（年末まで）申請募集
- ・会議開催2年前（2-3月頃）

関係部会、運営審議会附置国際会議主催等検討委員会でのヒアリング等

- （3-4月頃）  
運営審議会での決定、総会への報告
- ・会議開催1年前（6-7月頃）  
閣議了解（政府としての共同主催正式決定）  
共同主催学会との合意書締結、組織委員会の発足  
現在本年年末締切りの平成7年度共同開催会議の募集を広報しているところである。（詳細は、日本学術会議月報をご覧ください。）

### 日本学術会議主催公開講演会

本会議では、毎年公開講演会を開催しています。この講演会は会員が講師となり、一つのテーマを学際的に展開しています。この秋には二つの講演会の開催が決まりましたので、お知らせします。多数の方々のご来場をお願いします。入場は無料です。

I 公開講演会「20世紀の意味と21世紀への展望」  
日時 平成4年10月5日（月）13:30~16:30  
会場 日本学術会議講堂  
演題・演者

- 「国際政治の観点から-『長い平和』は持続可能か」  
永井陽之助 第2部会員  
（青山学院大学教授）
- 「文明論的観点から」 弓削達 第1部会員  
（フェリス女学院大学学長）
- 「科学・技術の観点から」 伊達宗行 第4部会員  
（大阪大学理学部長）

II 公開講演会「医学からみた日本の将来」

日時 平成4年11月28日（土）13:30~16:30  
会場 金沢市文化ホール 大集會室  
金沢市高岡町15-1 TEL 0762-23-1221

演題・演者

- 「子どもたち」 馬場一雄 第7部会員  
（日本大学名誉教授）
- 「成人病」 五島雄一郎 第7部会員  
（東海大学教授）
- 「医療技術の開発」 渥美和彦 第7部会員  
（東京大学名誉教授）
- 「食物と栄養」 内藤博 第6部会員  
（共立女子大学教授）
- 「医療制度の将来」 下山球二 第2部会員  
（大東文化大学教授）

## 物理学研究連絡委員会報告 「物理学研究の動向と将来への課題」

7月24日の運営審議会において標記の報告の公表が承認された。1970年代から1980年代にわたって、日本の物理学の研究動向、研究環境を、かなり厳しい批判的スタンスで蒐集した客観的データに基づいて分析し、1990年代における日本の物理学の課題を展望しようとする野心的な報告である。日本の物理学研究・教育の将来を論ずるための不可欠の資料といえる。A4版112ページにまとめられており、日本物理学会の協力を得て、同学会会誌印刷の形で関係者に公開される予定である。

本報告は、もともと第14期物理学研究連絡委員会が、久保亮五委員長の提案に基づいて「物理学の研究・教育に関する調査小委員会」(委員長長岡洋介京大基研所長、幹事中井浩二高エネ研教授、委員小林俊一東大理、鈴木洋上智大理Ⅰ、玉垣良三京大理、平田邦男山梨大教育、小沼通二慶大理の各教授)を設置してデータの蒐集・分析・要約を1990年7月から1991年5月にわたって精力的に行い、1990年6月20日の物理学研究連絡委員会全体会議に提出されたものである。第14期物研連任期終了に伴い、報告書及び今後の進め方についての取扱いを次期物研連への引継事項とした。これを受けて、第15期物理学研究連絡委員会は1992年5月22日の全体会議において本報告の取扱いについて協議し、公表を決定して中嶋貞雄委員長を通じて7月7日の第4部会の了承を求め、運営委員会に提案することとなった次第である。

本報告書が、日本の物理学の研究・教育に関心を寄せる多方面で活用されることを期待したい。

## 物理学研究連絡委員会報告 「理論物理学の研究体制の充実について」

7月24日運営審議会において標記の報告の公表が承認された。湯川秀樹博士のノーベル賞受賞にちなんで初の全国共同利用研究所として設置された京都大学基礎物理学研究所と一般相対論のユニークな研究で知られる広島大学理論物理学研究所は、1990年に統合され、内外の期待を集めつつ、理論物理学の総合的研究を目指す拡充・強化された基礎物理学研究所として再発足することとなった。しかし、現状には分野間の均衡が十分でなく、また北白川と宇治に建物が分離されている等、統合の実を十分に挙げ得ない状況である。

1992年5月22日の物研連全体会議は、このような状況の改善が速やかに改善され、理論物理学における日本の輝かしい伝統が復活されるよう、関係各方面に報告、支援を要請することとなった。

## 材料工学研究連絡委員会報告 「繊維工学研究・教育に関する諸問題」 産・学協力による繊維工学研究と教育の振興

わが国の繊維産業はかつて、日本を支える大産業であった。石油危機、貿易摩擦などによって低迷を余儀なくされた時期もあったが、今日では先端産業の要素技術ともなっ

て、その裾野を拡大し、また新合繊に象徴されるような高度機能商品を開発し、日本は世界のトップレベルを行く繊維技術国となった。現在繊維産業の従業員数は280万人、総取引額は約64兆円に達し、日本産業の中でも上位を占める基幹産業となっている。

この繊維産業を支える繊維科学技術教育を見ると、かつて国立大学には3つの繊維学部と、染色化学・加工学を含めて19の繊維関連学科があったが、産業構造の変化と共に改組転換されて、今日では繊維系学生の定員50人と激減するに至っている。大学院教育では、繊維学研究科の名称は一時期全廃された。その後、産・学の強い要望によって、平成3年に信州大学工学研究科に、繊維生物機能科学、繊維機能工学、繊維極限材料工学の3大講座が唯一設置されるに至った。

ところが、繊維産業の将来は、世界人口の増加、発展途上国の1人当たりの繊維消費量の増加から、繊維需要は膨大な成長力を秘めている。さらに、消費者主導型経済社会となって、ファッションにも、色、柄、デザインに加えて高機能性と加工技術が重要となってきている。また、繊維素材から最終商品までをシステム化した生産・物流技術、産業資材用途の拡大、地球環境改善への用途開発への期待高性能スーパー繊維による航空・宇宙、海洋、原子力、土木・建築分野への貢献、光ファイバーによる情報通信分野、中空糸による人工腎臓、酸染濃縮などヘルスケア分野、海水脱塩造水など先端分野でも重要な産業として自立しつつある。

こうした繊維産業発展の基礎となる高度技術の開発を促進し、その力を次世代へと継承させるためには、高度に訓練・教育された人材の育成が不可欠である。我が国にとって、繊維科学技術の研究・教育機構の再構築は焦眉の急となっている。これに対して、欧州ではEC統合を控え、各国の特徴に応じ産学協力し、繊維系大学の単位互換制度を指向するなど、繊維技術教育の再活性化に成功している。米国では繊維関連大学が十数校もあり、その中でノースカロライナ州立大学を繊維科学技術教育のセンターとして、ニューヨーク州立ファッション工科大学をアパレル・ファッション教育のセンターとして位置付けて、全世界へ人材を送り出している。

我が国で、産学協力して設立する機構としては、全国繊維関連大学、研究所、及び地域産業を結び役割を持ち、我が国の優れた繊維工学知識の世界への発信と、国際的人材育成への寄与のため、欧州、米国と並ぶ、東アジアの繊維科学・技術の中心機構として活動することが望まれる。

この活動は、我が国に全世界の人々から期待されている国際貢献の一つとなろう。

御意見・お問い合わせ等がありましたら、下記までお寄せください。

〒106 東京都港区六本木7-22-34

日本学術会議広報委員会 電話03(3403)6291